



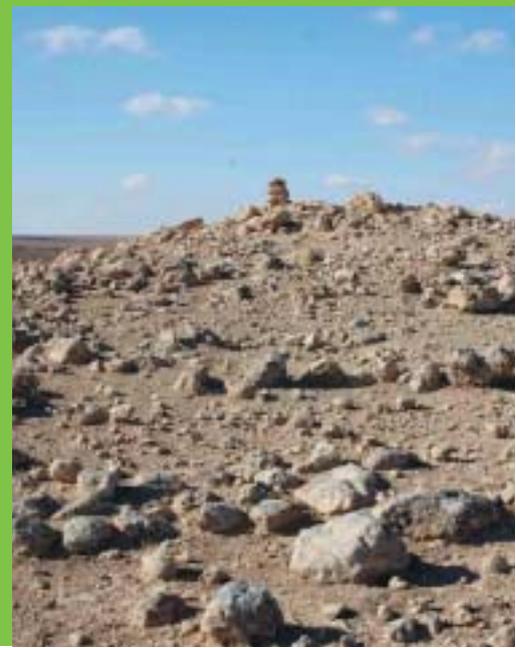
Integrated Research in the Bishri Mountains on the Middle Euphrates

セム系部族社会の形成



文部科学省科学研究費補助金
「特定領域研究」
Newsletter No. 3

2006年8月号



目 次

考古学フィールドとしてのジャバル・ビシュリ	常木 晃	1
組積造の建築遺構をめぐり歩く - レバノン篇	岡田保良	9
パルミラの植物文様	宮下佐江子	15
GISと遺跡の立地調査法	松本 健	20
公募研究「北方ユーラシア遊牧民部族社会の考古学的研究」 の開始にあたって	高濱 秀	24

表紙

A
B | C

A：ジャバル・ビシュリのビール・ディッディ

B：現在も使用されているディッディの井戸（ジャバル・ビシュリ）

C：尾根上に認められるケルン墓のひとつ（ジャバル・ビシュリ）

考古学フィールドとしてのジャバル・ビシュリ

常木 晃 (筑波大学)

計画研究「西アジアにおける都市化過程の研究」研究代表者

本特定領域研究の計画研究のひとつである「西アジアにおける都市化過程の研究」では、西アジアの都市形成とその発展について、農耕社会や遊牧社会に見られる部族性の果たした役割に留意しながら、考古学的、歴史学的、言語学的な研究方法を用いて研究を推進しようと計画している。本特定領域研究の主対象フィールドとなっているジャバル・ビシュリで、そうした研究がどのように実施できるのだろうか。実際に特定領域研究全体での調査が開始される前に本計画研究なりの一定のアセスメントを得たいと考えて、ジャバル・ビシュリの自然環境とそこにある遺跡の状況を確認するために、2日間の短い現地視察を試みた(2005年12月26日～27日)。本稿はその視察結果を紹介するものだが、これはもとより計画的な踏査ではなく、ごく短期間のうちに目についた遺跡を見て回っただけの不十分な視察に過ぎない。西アジアで考古学的な調査を長年おこなってきた者が現地を見た印象として、受け取っていただければ幸いである。

ジャバル・ビシュリは、ラッカ、ディ・エッ・ゾール、アル・シュクネの3地点を結んだ内側に位置する、東西約60km、南北約30kmほどの、山地と言うよりも台地である(図1)。アル・シュクネ側から最初に見えるジャバル・ビ



図1 ジャバル・ビシュリの位置

シュリも、平原の中に平坦な台地が浮き上がっているように見える(写真1)。実際の標高は800～900mで、周りの平原との比高差も数百mしかない。しかしながら、ユーフラテス河を北メソポタミア方面からシリアに上ってきたときに最初に見える台地であり、ラッカ方面から下ってきたとき



写真1 ジャバル・ビシュリ遠景

も、パルミラ方面からディ・エツ・ゾールに向かうときにも、ランドマークとして目に入る台地である。そうした意味で、初期王朝時代より遊牧系アムル人の故地として粘土板文書で盛んに言及されてきたことも(本ニューズレターNo.2 山田重郎「文書史料におけるセムの系譜、アムル人、ビシュリー山系」)頷けるかもしれない。

比高差の低い台地なので、ジャバル・ビシュリ内へはきわめて容易にアクセスできる。現在ビシュリ内へは、東側のディ・エツ・ゾール、南東側のアル・ショウラ、北側のアル・サブハを結ぶアスファルト道路が走っていて、西側を除いてアプローチはよく整備されている。筆者も、南東側のアル・ショウラからビシュリ内に入り、ほぼ中央のアシュ・シュジェイリからアスファルト道路を外れて南下し、ジャバル・ビシュリの南東部を中心に遺跡を見て回った。また、後述するビール・ディッディへは、カバジェブ付近から砂利道を北上して到達している。

アル・ショウラからアシュ・シュジェイリ

ジャバル・ビシュリ南東のアル・ショウラから台地中央へは、前述したようにアスファルト道路が整備されている。筆者がここを訪れた12月末には、このアスファルト道路の両側に、ベドウィンたちが多数のテントを張っていた(写真2)。ベドウインのテント間の距離はかなり短く、遊牧民銀座の様相を呈している。ここまで多数の遊牧民テントが密集して営まれている状況を、筆者が見たのは初めてだった。



写真2 ベドウインのテント群

彼ら近現代の遊牧民が残した多数のキャンプ址が、ビシュリ内に多数認められる。キャンプ址の中にはもう少し古い時期のものもあると考えられるが、多くはここ数百年～数十年で残されたものと見て間違いはない。通常は、ごく単純な石列や炉跡などが残されるが、中にはタノールや家畜用の水飲み場を設けたキャンプ址もある(写真3)。こうしたキャンプ址は、1度の利用というよりも、同じ集団によって繰り返し利用されていたものと思われる。キャンプ址の営まれているのは、近くにワディが走っている場所が多い。ワディの近くに井戸を掘り、そこから生活用水や家畜用の水を得ている。

アシュ・シュジェイリから南下

ビシュリのほぼ中央部アシュ・シュジェイリからは、いくつかの未舗装道路が西と南に走っている。筆者はこのうち、中央部やや東よりの地点から広い未舗装道路を南下した。東西に走る尾根を越えると、南北方向にいくつかの尾根が連なるが、その尾根上には点々とケルン墓が認められる(写真4)。広い場合は数km、近い場合では数十mほどの間隔で構築されているが、多数のケルンがまとまって営まれている例は見なかった。近づいてみると、土と石で積み上げた径10m前後のケルンが多く(写真5)、中には石だけで積み上げたものもある。石で方形に組まれた主体部が露出しているものもあり、明らかに墓であろう。僅かに表採できる土器片はイスラーム期のものがほとんどで、一部ローマ=ビザンツ期まで遡る可能性のあるものもある。ケルン墓の付近に集落址となるような遺跡は全く認められないため、これらのケルン墓が遊牧民たちによって残された可能性は非常に高い。また、ケルン墓の近くにストーンサークル状の遺構が観察できた例もあり、表採遺物からみると、ケルン墓よりもやや古いローマ=ビザンツ期のものと思われる。やはりこ



写真3 近現代遊牧民のキャンプ址



写真4 尾根上に点々と見られるケルン墓



写真5 尾根上に認められるケルン墓のひとつ
れも、遊牧民たちが残した墓であろうか。

ビール・ディッディ

ジャバル・ビシュリ内で最も水が豊富に得られる地点のひとつが、台地南端のほぼ中央に位置するビール・ディッディ(ディッディの井戸)である(写真6)。ビール・ディッディへは台地中央



写真6 ビール・ディッディ



写真7 ローマ=ビザンツ時代と想定される岩窟

から南下するのはかなり困難であり、筆者はビシュリの南側を走る幹線道路から、未舗装道路を北上して直接到達した。ビール・ディッディは、ローマ=ビザンツ時代と見られる岩窟(写真7)やストーンサークル(写真8)、近現代イスラームの墓(写真9)、時代不明の水場遺構(写真10)などが集まっている複合遺跡である。その中心は、現代も使用されているディッディの井戸であり、この井戸は、ワディ底付近につくられている(写真11)。



写真8 ビール・ディッディ付近のストーンサークル



写真9 近現代イスラームの墓

ビール・ディッディ付近で表採できる遺物は、ローマ＝ビザンツ期からイスラーム期の土器片が圧倒的に多く、基本的にはそうした時代を中心に営まれてきた複合遺跡といえるであろう。岩窟やストーンサークルは、おそらくローマ＝ビザンツ期の墓と考えられるだろう。水場遺構も同様の時期であろうか。ビール・ディッディは現代の遊牧民たちにも盛んに利用されており、付近の自然丘陵上には彼らの墓が造られている。自然丘陵上の薄い文化堆積やオスマントルコ時代



写真10 時代不明の水場遺構



写真11 現在も使用されているディッディの井戸

と思われる小さな家屋を除くと、定住集落と見られるような遺跡はまったくといってよいほど認められないため、ビール・ディッディは現代と同様に、古くから主に遊牧民によって利用されてきたと考えて大過ないであろう。

遊牧民研究のフィールドとしてのジャバル・ビシュリ

筆者がジャバル・ビシュリを視察したのはわずか2日間であったが、目にできた遺跡のほとんどが、遊牧民が残したものと想定できる遺跡であった。ビシュリ内で最大の複合遺跡と見られているビール・ディッディもまた、定住農耕民や交易民が残した遺跡というよりも、遊牧民が古くより利用していた遺跡と考えることができる。つまり、農耕民の遺跡や都市遺跡といったものは、筆者の視察ではジャバル・ビシュリ内にほとんど認められなかった代わりに、遊牧民に関わると思われる遺跡が相当に集中していることが判明した。これらの遊牧民に関わる遺跡の年代は、その多くがローマ＝ビザンツ時代やイスラーム時代、そして近現代に営まれたものであるが、鉄器時代や青銅器時代に遡る遊牧民の遺跡が発見できる可能性もある。また遺跡踏査を本格的におこなえば、旧石器時代のオープンサイトなども発見できるであろう。

ジャバル・ビシュリの外縁のうち、特に西側と北側には、Strata Diocletianaと呼ばれるローマ軍の防衛前線が敷かれていたが、その防御対象は主に遊牧民であった。こうしたライン上には、ルサーファやハレピヤといった著名な遺跡が並び、また小さな要塞や軍事拠点も多数存在している。初期イスラーム時代においても、ジャバル・ビシュリの南西麓には著名なカサル・アル・ヘイル・シャルキ遺跡が位置しており、この要塞も砂漠の部族からウマヤド王朝を防衛することがその建設目的のひとつに考えられている。つまり、ローマ＝ビザンツ時代から初期イスラーム時代にかけて、ジャバル・ビシュリの西側を境に、帝國的な社会と遊牧社会が対峙していた様相が色濃い。その辺りはまた、100～200mmの降雨量線が東西を分けているラインでもあり、農耕牧畜社会と遊牧社会との境界ともなっている。とすると、ジャバル・ビシュリ内は当然のことながら遊牧社会のホームランドとして、遊牧民たちの生活の主要舞台となっていたものと考えられる。それは現代のジャバル・ビシュリの状況ともよく符合している。

今回は残念ながらローマ時代以前の遺物をビシュリ内の遺跡で目にするのがかなわなかったが、おそらくビシュリ内にそうしたより古い遊牧民遺跡を見出すことはそれほど困難とは思えない。いずれにせよ、ジャバル・ビシュリを舞台にして遊牧的な部族社会の出現と展開を追究するのはきわめて実りの多い仕事になると思われ、こうしたテーマを研究するための第一級の考古学フィールドということができるだろう。

組積造の建築遺構をめぐる歩く - レバノン篇

岡田保良 (国士舘大学イラク古代文化研究所)

計画研究「古代西アジア建築における組積技術の形態と系譜に関する研究」研究代表者

1. はじめに

私たちの研究課題は、ユーフラテス中流域を中心としつつ広くイラン西部から地中海東沿岸に至る西アジア一帯の空間を「横軸」に、歴史的には遠く先史の時代から古代の諸文明を経てイスラームの文化が浸透するまでの連続的な時間を「縦軸」に見立てながら、「組積造」と総称される建築構法をファクターとして織り込むことにより、古代西アジアの建築を技術の系譜として捉えなおそうと試みるものである。

組積造という述語を広辞苑で引いても出てこない。彰国社の建築大辞典を紐解くと「主体構造を石・煉瓦・コンクリートブロックなどの塊状の材料を積上げて造った構造」で「積固め式構造」という別称もあると出ている。英語ではmasonry。それにあたる日本語として遠い先達が造ったものなのだろう。石の建築も煉瓦積み建築も、その壁は圧縮力に対しては強く抵抗するが、曲げや引っ張りとして働く外力には弱く、そのため耐震性に乏しいという構造上の特性をもつ。組積造として一括りにしてよい理由がそこにある。

西アジアの諸地域には、こうした組積造の建築文化がその基層にある。しかしそこに現れる諸々の建築形態や組積技術はじつに多様だ。組積造では、壁を造ることは容易だが、扉や窓という開口部を設ける場合や、部屋や通路を覆うには創意工夫が必要だ。最も一般的には、木材や木の幹といった梁材の助けを借りて、平らな屋根や扉の楣(まぐさ)、あるいは簡単な小屋組みを架けて済ませるが、時には建材の制約や施工主の要求に応え、工人たちが技術の蓄えを駆使し、新しい組積法を試みながら建築に挑む。様々なアーチの形態をはじめ、煉瓦や石材を組み上げたドームやヴォールトといった頭上に架かる曲面構造は、部材同士を迫り持たせて形を造るという彼らの英知が結実したものだ。そこには地域や集団が古来受け継いできた技術上の伝統がとくにつよく反映する。

日本の建築歴史を顧みたとき、戦国時代から江戸時代にかけて日本各地の築城術に貢献した近江六太(あろう)の石工集団がつとに知られているし、遠く古墳時代に見られる卓越した石室は熟練した専門家集団がいたことをつよく印象づける。西アジアにおいても、建築組積の多様さを空間と時間の座標に整理し終えたとき、あるいはその過程で、その向こう側に部族ないしはそれに類する社会集団が透けて見えてくるのではないかと期待するのである。



図1 テル・グッバ第7層発掘の円形遺構中心部(1979年)

2. テル・グッバの円形遺構

この研究の契機は、本研究代表者らが1970年代に手を初めたテル・グッバの発掘とその遺構復原の研究にさかのぼる(図1)。場所はメソポタミア北東部、イラクのディヤラ川流域にあるハムリン盆地。発掘された遺構は全7層にわたるが、研究課題はもっぱら最下層の全面に広く展開する同心円状の稀有な建物だった。

ジェムデト・ナスル期(前3000年頃)を通じて存続したという年代観が与えられている(注1)。建物全体は長径約80mの卵形平面をなすが、ほぼ完全に掘りあげられた中心部分を観察すると、中心から第4番目と数える壁体までは、平面上完全な幾何学円に則って日乾煉瓦が積まれていることが判明した。これら中心部の煉瓦積みと、その外側を囲む第5の壁は、床からの高さ4m近くまで遺存していた。残念ながらこの遺跡は人工湖に水没する定めになっていたためもはや現存しないが、発掘完了時の遺構は40分の1の模型としてその形状は残されている。

この建物がもとはどんな目的で築かれたのか、どういう形態を有していたのか、考古や建築の専門家たちの議論が白熱した。機能面からの考察にあたっては、神殿か、倉庫か、要塞か、あるいはその組み合わせや歴史的变化など様々な仮説が出されたまま今日に至っている。一方、形の復原という課題については、おおよその共通認識を得ることができた。発掘遺構の模型が、というより模型製作のプロセスが、その上部の復原形状を考える際に大いに役立った(注2)。正確に円の軌跡を描く平面形、放射状に積まれた日乾煉瓦の壁体、持ち送りの擬似ヴォールトを見せる開口や通路、第4の壁上端の傾き等々、上部構造にドームを想定する見解に異論はなかった(図2)。工法として、個々の煉瓦を若干内向きに傾かせた迫持ち状態のリングを重ねる組積法であり、その施工手順から、正三角形を内接させるという尖頭形のドーム形状が想定された。それは、当時すでに、煉瓦積みの技術に熟達した人たちがいたことを物語る。現在も東イランや中央アジアで実例を見ることのできる構造である。ほかにも比較参照の対象は、ハラフ期のトロス建築や、ミケナイ文化のトロス墓、北シリアにいまも見られる「蜂の巣型」住居、その起源を思わせるキプロスや北イランの円形家屋の集落遺跡、さらにはイランのチャハル・タークやイスラームのドームにまで及んだ。



図2 テル・グッバ円形遺構の復原模型(1980年)

さらに、この遺構と規範を同じくする類例は、メソポタミア低地部には全く見られないにもかかわらず、グッバのほかハムリン盆地に若干と、西に隣接するアダム川流域の盆地にも分布することが知られる(注3)。テル・グッバの建築を実現した工人たちは、シュメール、バビロニアといった文明の中枢を担った人々とは、異なった建築伝統を育んでいたにちがいない。

グッバの復原研究以後、西アジア地域で数多くの歴史的遺構と接するなかで、石積み、煉瓦積みの多様さ、巧みさを私たちは見いだしてきたが、そのたびに、筆者はテル・グッバの卓越した遺構を思い返すのである。

3 . 2005年度の調査概要

古代西アジアの建築組積を追求しようとする本研究は、比較の観点からできるだけ広域に事例を求める必要を実感している。ユーフラテス中流域の遺構事例の調査は無論必要だが、準備の関係上2005年度は、同じセム系の民族が文明の足跡を残すレバノン国内の遺跡を対象とし、建築遺構にみる組積造の特徴を調査した。訪れて観察した遺跡を旅程順に振り返ると以下の通り。

- ・ ベイルート市中、中世教会と古いモスクを中心にフェニキア時代やローマ時代の遺構。
- ・ ベイト・メリ修道院周辺のローマ時代神殿の痕跡。
- ・ ベカー盆地の二八に建つ2棟のローマ期神殿。
- ・ パールベクにあるユピテル、バッカス、ヴェヌスのローマ時代3神殿。
- ・ アンジャールの初期イスラム都市遺跡とマジダル・アンジャールの神殿。
- ・ ティールのローマ時代からビザンティン時代の都市遺跡とラマリ地区墳墓群。
- ・ ティール郊外のティブニン城。
- ・ ティールの水源ラスル・アイン。
- ・ シドンの旧市街と中世城郭。
- ・ エシュムーン遺跡に見る前1千年紀(新バビロニア時代)の城壁、およびビザンティン時代遺構。
- ・ シュヒム遺跡の主としてビザンティン時代の教会と搾油施設。
- ・ ビブロス遺跡の青銅器時代遺構の多様な城壁と、ビザンティン時代教会および城郭。

これらの遺跡に見出される多様な建築組積に注目すると、いきおいローマ時代に著しく進歩し広く普及した石積みに観察の目が偏りがちだが、それ以前の時代にも風土や伝統技術を反映したと見られる興味深い遺構がある。その典型例として、レバノンの南40km余に位置するエシュムーン遺跡をまず取り上げたい。

ローマ、ビザンティンのモザイク床の華麗さでも名高い遺跡だが、もとは遺跡と同名の神に捧げられたフェニキア人の聖地である。ここでは複雑に折り重なる石の壁に注目したい。時代によってこれほど極端に石積みの技法を変化させる遺跡は、めったに出会えるものではなく、観察する私たちに遺跡を訪ねる楽しさ十分に味わわせてくれる。一見してわかる石工技術の多様さがビブロス遺跡と共通する点と、古くはアケメネス朝ペルシアの時代以前にまで遡ると説明される考古学上の編年観は、西アジアにおけるレバノン固有の、まちががなくフェニキア人の活躍した領域としての地域性を強く印象づける。なかでも「新バビロニア時代」と年代付けられる基壇の残滓である勾配つきの壁体は、ここでは特異であると同時に、遺跡中でも最も古い時期の組積とされる。その20度前後の勾配と磨いたような仕上げの切石積は、より東方のセム系世界よりも、工



図3 エシュムーン、新バビロニア時代とされる傾斜組積(2006年)



図4 エシュムーン、アケメネス朝ペルシア時代とされる巨石積みの擁壁(2006年)



図5 エシュムーン、アシュタルテの聖所の石造壁(2006年)



図6 バールベク、ユピテル神殿中庭エクセドラの架構(2005年)



図7 バールベク、ヴェヌスの神殿、上部架構の痕跡(2005年)

ジプトの伝統技術を想起させる(図3)。まったく同様な組積が、ピブロスの「ペルシア時代の城塞」の北東側にも遺存する。その由来を含め、工人集団の移動、消長を反映するものとして、より注意深い考察を進める必要があるだろう。

ペルシア帝国が伸張した時代、エシュムーンには切石積みの壮大な基壇が南側の丘に沿って営まれる。その石材の大きさと、額縁状の表面仕上げが時代を物語る(図4)。その足元に設けられた「アシュタルテの玉座」を擁する聖域の囲壁はヘレニズム時代を代表し、その組積は石材の小口を縦置きにして並べるといった特徴を持つ(図5)。上方の斜面に沿って長く延びる城壁にも同様の手法がみられる。城壁の組積における石材のこうした扱いは、ギリシアのメッセネ遺跡やヨルダンのウム・カイス遺跡にも見られ、東地中海世界のヘレニズム期に通有の組積だった可能性がある。このように、エシュムーンは、地域の特性が薄められるローマ時代以前の組積造を知ることのできるレバノンでは数少ない時代の遺跡なのである。調査記録を精査する必要を痛感しているが、まだその作業は緒についたところである。

ローマ時代の遺構の中では、やはりパールベクに見るべきものが多い。巨石の使用や石の彫刻に目を見張るのはもちろんだが、建築史的には、ユピテル神殿の大中庭に面するエクセドラの上部に架かる曲版の巧みさをまず特筆したい。8分の5円の平面形に載るドーム曲面を、正八角形を描く直線で分割するという、合理性や必然とはかけ離れた解決法で石材を組む(図6)。同じ遺跡に建つヴェヌスの神殿の上部架構も同様だが、こちらはドームを同心円で切り取っていたと推定される(図7)。これらは、西アジア地域における切石を組み上げた曲版の事例として最高の技術水準を示すといえるが、石工の技術をさらに進め、正方形平面の空間に切石ドームを架けるといった事例がヨルダンを中心に散見される。ジェラシュの西浴場付属棟やウム・

カイスの地下墓廟などが該当する(注4)。いずれの遺構も、紀元2世紀後半を前後する時代とするのが通説であり、円熟した技術に裏打ちされてその時代に流行した石造ファッションと言えるのかもしれない。南レバノンのティールにのこるローマないしビザンティン時代の墓所にも、かすかな痕跡ながら、扁平な曲面を切石で組んだ遺構が現存する(図8)。これらについてはヨルダンの調査報告として、いずれ稿を改めて考察したい。



図8 ティール、ゴルフ・マトワニーヤ、切石組による天井架構(2006年)

矩形平面にドームを架ける組積構法については、クレスウェルがペンデンティヴ・ドームとの関係ですでに注目しており、建築史におけるペンデンティヴ成立の重要性を早くに指摘している(注5)。彼は地中海からオリエントにかけての広い地域を視野に入れつつ、エジプトやアッシリアの事例にまで遡り、その到達点は、6世紀、イスタンブルのハギア・ソフィアとみる。その過程において、古来各地でドームを架けるために擬似的ないし初歩的ペンデンティヴの採用が試みられたが、原理的な意味で完成した事例を確認できるのは、シリア、パレスティナ地方、2世紀後半のはじめ頃だったようである。

ほかにも多くの建築史家が、ドームの系譜について業績を残しているが、正面から『四角形に載るドーム』を書名としたJ.フィンクによる研究では、「東方世界において方形の上に円蓋を据えるという課題にとって、西方から利益を得ようとしても無駄である」「技術上の発明として、方形の上に載る円蓋はまったく東方のもの」「小アジアと結び付けて考えるべきで、円蓋形状の発祥地は小アジアとみる」という認識であり、まだまだ検証する余地が残されている(注6)。ここでは紀元前後の時代からヨルダンを含むレバント地域に限って初期イスラームの時代にまで継承されるという可能性を指摘しておきたい。

以上は今回の調査成果のごく一端だが、このたび訪ねたレバノンの遺跡をふり返ると、ピプロスを除いて先史期の遺跡が乏しく、当地域に石造以外の建築、とくに日乾煉瓦建築の伝統がどの程度まで浸透していたのか見きわめることができなかった。今後の課題としたい。

なお、初期イスラームの都市アンジャールの遺跡について、今回の調査に基づく研究分担者の意欲的な復元的考察の一端が公表されている(注7)。

4. 今後の計画

今回の調査を通じ、この特定領域研究における建築組積技術の一つの焦点として、ドーム架構ないしはそれに準じた曲板の組積術に、私たちはますます注目するようになった。その到達点でありかつその後のドーム建築の規範とされるハギア・ソフィアのペンデンティヴ型ドームに至る技術系譜は必ずしも明らかではなく、それを遡る時代について広域に事例を検証する必要がある。

とくにかつてローマ領であったシリア、レバントというセム系民族の土地に遺された建築遺構は重要である。同じ時代、イタリア半島ですでに普及していたコンクリート工法が、当地方にはなぜか普及せず、彼らは切り石組積にこだわった。そうした観点から、レバノンに続いて今夏はヨルダン領内の遺構を重点的に観察した。近々報告する予定である。

またレバノンでは全く接することのできなかつたアドベ(日乾煉瓦)の遺構をはじめ、上部構造以外の建築組積についても、今後は注意を払いたい。石造や焼成煉瓦造の遺構に比べ、アドベ遺構の検証は難しい。現在の知見では、ヴォールト架構については、メソポタミアとエジプトで早い時期(前3千年紀末頃)に発達したことがわかっているものの、イラン、アナトリアにアドベによる曲板架構の例はきわめて乏しい。ビシュリ山系における今後の考古学的調査は、果たしてどのような事例をもたらしてくれるだろうか。新たな資料と知見が得られることを大いに期待している。

注

- 1) 詳しくは『ラーフィダーン』第2巻(1981)所収の特集記事「イラク・ハムリン発掘調査概報」。
- 2) この復原研究については、科研特定研究の報告『イラク、テル・グッバ第 層発掘の建築遺構復原に関する研究』(1982)。
- 3) 『ラーフィダーン』第11巻(1990)所収、藤井秀夫・井博幸「アル・アダウム地域の予備調査」による。
- 4) ウム・カイスの事例は、T. -M. Weber *Gadara - Umm Qes, I* (Harrassowitz, Wiesbaden 2002) に報告があり、拙稿「ガダラのドームカル・ヴォールト A domical vault at Gadara, Jordan」(『第12回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』(2005)所収)でもその重要性を論じた。
- 5) Cresswell, K.A.C. *Early Muslim Architecture I, Umayyads, Early 'Abbasids & Tulunids* (Oxford, 1932).
- 6) Fink, Josef *Die Kuppel über dem Viereck, Ursprung und Gestalt* (Freiburg/München, 1958).
- 7) 第30回地中海学会大会で、本計画研究の研究分担者、深見奈緒子氏が「アンジャール 初期イスラームの宮殿都市への考察」と題して発表した。

パルミラの植物文様

宮下佐江子（古代オリエント博物館）

計画研究「オアシス都市パルミラにおけるビシュリ山系セム系部族文化の基層構造と再編」
研究代表者

パルミラは紀元前18世紀のマリ出土文書に「タドメル人」について述べられ、紀元前14-13世紀のエマル文書に3人の「タドメル人」の名前と1人の印章が押されているなど古くから知られていたが、その存在が最も大きく歴史の中で花開いたのは紀元後1-3世紀のローマ帝国属州の一都市としてパルティアとローマの交易の仲介地となって発展した時代である。

パルミラに残された美術作品をみると、ギリシア=ローマ的要素と東方パルティア的要素、西アジア古来の伝統的要素が混ざり合った独特の様式を呈している。本研究では従来述べられてはいたが、表層的に看過されてきた感のあるパルミラ美術をより精査することによってセム系部族社会が形成された後の時代のその本質の理解に努めようとするものである。

パルミラの植物文様

パルミラは石造りの建築遺構が2000年前のこのまちの栄華を伝えているが、そこにあらわされた植物文様の多彩なこともつとに知られている。

多くの隊商が行き交ったであろう記念門(図1)には、アカンサスの櫛の葉を基調にした連続文様



図1 記念門



図2 記念門脇柱文様

と六弁ないし八弁の花、ナツメヤシの幹やクローバー形の葉をもつ蔦が刻まれている。(図2)

また、そこから続くメインストリートはやはりコリント式のアカンサスをもつ円柱が7m間隔で約1kmにわたって続いている。この記念門とメインストリートは2世紀後半の建立とされる。

この記念門の後方、東南方向にあるベール神殿はパルミラ最大の神殿である。しかし、この神殿の位置はパルミラの主神殿でありながら現在見られるまちの中心軸からずれている。神殿はまちの中心に位置するという原則からはずれたパルミラの構造に長年疑問をもっていたが、ウィーン大学のシュミット・コロネ教授はこのずれこそがパルミラの紀元1世紀後半の大洪水の証拠の一つとみている。

沙漠で大洪水ということに違和感があるかもしれないが、パルミラも冬には雨が降り(時には雪も降る)、その量が多いときには遮るものがない大地を奔流となって濁流が襲うという。これまでも20年に1度くらい洪水があり、そのためパルミラ博物館の入り口は高くしてあると聞いている。奈良・パルミラ遺跡調査団による東南墓地の発掘でもC号墓の内部に洪水の跡がみられ、そのためこの墓は3代ほど使用されただけで断絶したことが明らかになっており、沙漠の洪水は決して特異なことではない。

シュミット・コロネは、ヘレニズム時代のまちは現在の道路とナツメヤシの果樹園の間の今は土の堆積しかない場所にあったとして数年来発掘を行って、ヘレニズム期とみられる住居を検出している。パルミラは1世紀後半に大規模な洪水に見まわれ、それまでの市街地から現在残されているメインストリートを中心とする新しいまちが建設されたという。この地域の発掘がすすめば、西方の影響を受け入れたパルミラ興隆期の最初の様相が明らかにされるであろう(図3)。



図3 シュミット・コロネによる発掘現場

さて、ベール神殿は紀元後32年に本殿が奉獻され、2世紀半ばまで正門や柱廊が建設され続けたが、その区域は青銅器時代中期(紀元前2200-1550)にさかのぼる聖域であり、古来からの伝統を

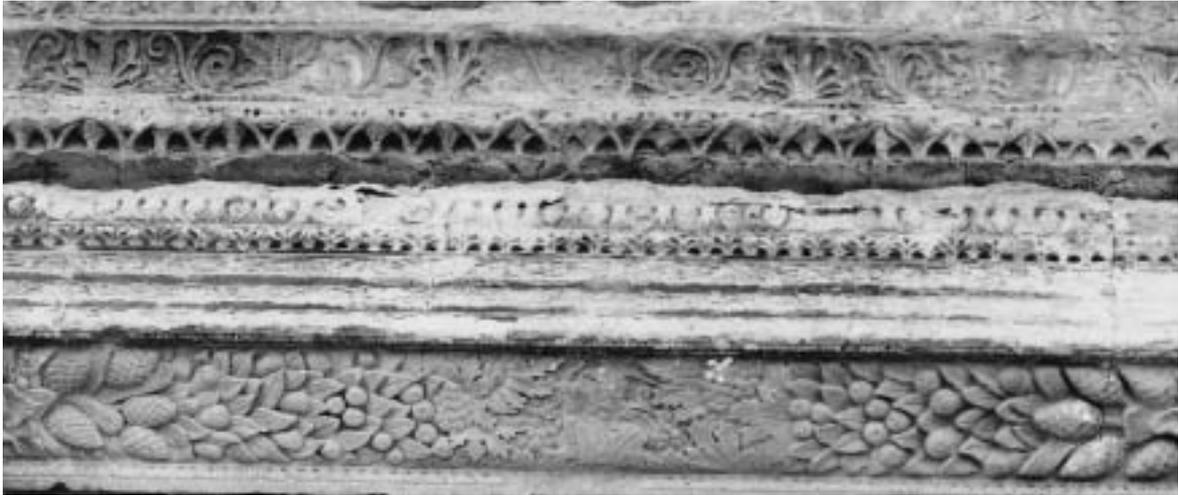


図4 ベール神殿本殿入り口上部の彫刻



図5 ベール神殿入り口脇柱の彫刻

図6 大梁 聖なるもの(?)を運ぶ駱駝と奉獻者たち



内包した宗教建築物である。その本殿は西アジア式神殿の特徴をもち、柱廊と本殿の屋根は別作りでそれぞれの縁にアッシリアの宮殿に見られるような凸形飾りがついていた。本殿内部の南北の神像安置所や門の入り口に葡萄唐草文やアカンサス、ナツメヤシの幹などの植物文様が西方伝来の卵鑲文様とともに刻まれている(図4、5)。

柱廊の天井は大梁を渡していたが、現在では本殿の門の右側に置かれている。これらの梁のなかで駱駝の背中に覆いをかけた神聖なものを運ぶ祭儀の場面がある。頭からすっぽりと布を被った現在の厳しいイスラーム教徒のような女性が付き従う不思議な光景である(図6)。

もう一つは下半身が蛇で上半身が人間の怪獣と戦う神々が描かれているが、神々は武装してはいるが、正面を向いて整列し、戦いの躍動感は全くあらわされていない(図7)。

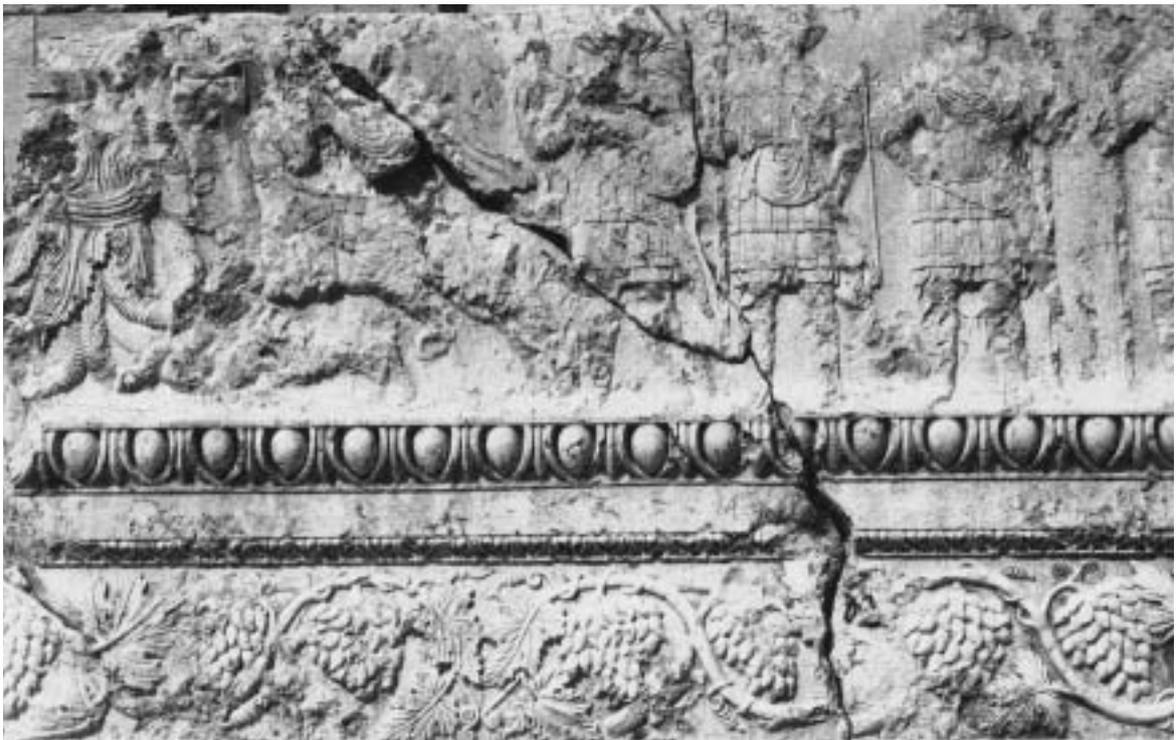


図7 大梁2 左側に蛇脚の怪獣がいる

両者の下段には我が国の奈良薬師寺金堂本尊台座の葡萄唐草文に通じる勢いのある葡萄文様が見られる。これは精緻な観察によってデザイン化されていると同時に写実的でもある、見事な作品である。

この梁の下面に、アカンサス唐草文に有翼女神やパルミラでは非常に珍しい裸体の有翼男性像、エロス、馬の上半身をえがいた浅浮彫がある(図8、9)。この浮彫は普段は大梁の下面にあって見ることができないが、筆者の所属する博物館でパルミラ彫刻の写真集を製作したときに、ホテルの部屋の鏡をはずして地面と梁の間に差し入れ、撮影することができた。花綱やリース、アカンサスの葉の間に人物を配する構図はローマの石棺彫刻やモザイク装飾にみられるものであり、半身の動物が植物文に囲まれるものもモザイク画にある。しかし、この梁の浮彫では馬は傍らのエロスが茂みから生まれ出た馬をその前脚を掴んでひっぱりあげているようで、モザイクや石棺彫刻の植物文が純粋な空間装飾として採用されている装飾性に比してアカンサスの葉は生き物その

ものでさえある。植物から生えてた人間の表現は豊穡・多産の象徴としてロマネスクやゴシック建築のいわゆる「グリーン・マン」やイスラームの「ワークワーク文様」にみられるが、それらにさきがけて奈良・パルミラ遺跡調査団によるF号墓の墓室内の梁には植物から発生する人物像浮彫がある(図10)。植物から生えるといえば、エジプトのヌウト女神がイチジクの樹の化身としてあたかも樹から生えた姿で描かれることがあるが、ヌウト女神のような表現はエジプト以外の西アジアではこれまで出現していなかった。植物から生まれるもののエジプト以外の西アジアでの美術表現の嚆矢はパルミラにあると言ってよいだろう。それらがどのような意味をもっていたのか、パルミラの人々の植物に対する想念などを今後の調査のなかで明確にしていきたいと考えている。



図8 大梁2下面 有翼女神と裸体の有翼男性像



図9 大梁2下面 アカンスから生まれた馬をひっぱるエロス



図10 東南墓域F号墓東側壁面上部の梁の浮彫にみられる植物から上半身をのぞかせる裸体の人物

GISと遺跡の立地調査法

松本 健 (国士舘大学イラク古代文化研究所)

計画研究「西アジアにおける考古遺跡のデータベース化の研究：衛星画像解析による探査法」研究代表者

1、ユーフラテス川中流域における河川の変化

ここに2005年の7月2日(Spot)に撮影された衛星画像のトレス図(図1)と1946年にゼノビア遺跡の調査の際に測量されたユーフラテス中流域の地図(図2)がある。これらの特に河川の変化を中

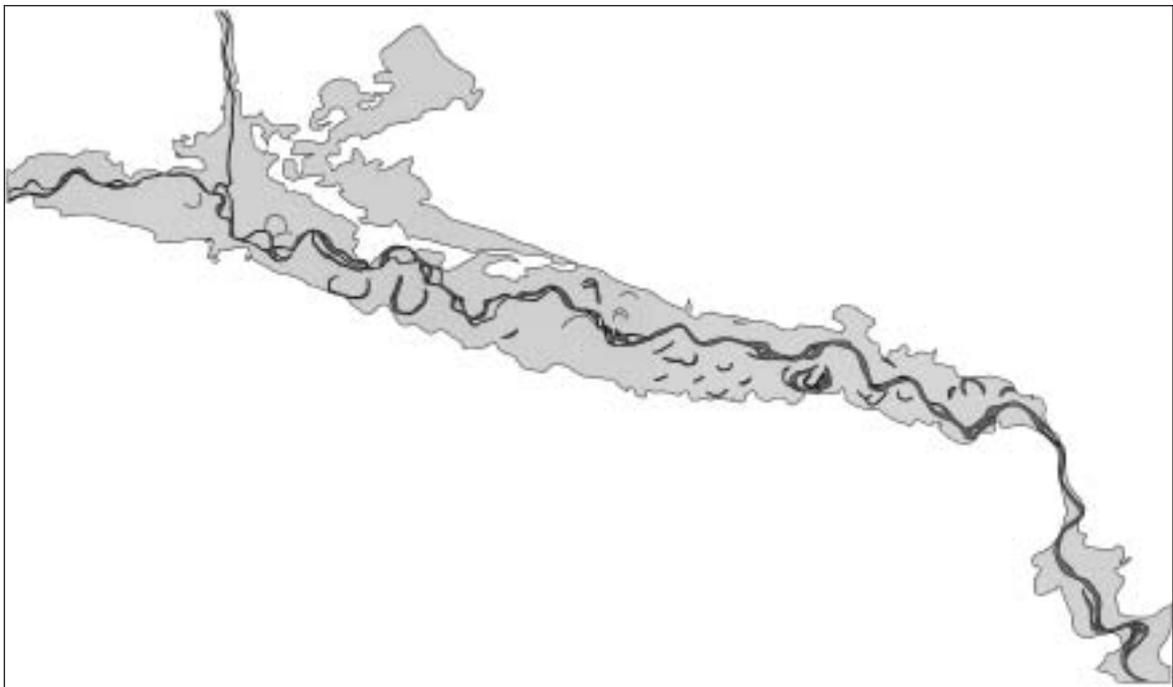


図1 20050702(Spot)に撮影された衛星画像のユーフラテス川中流域のトレス図

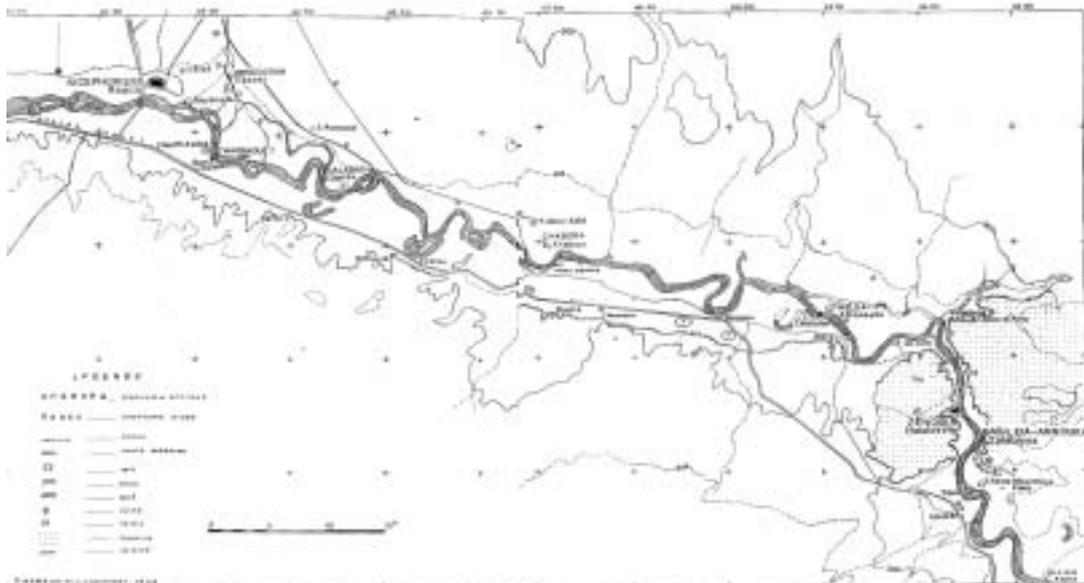


図2 1948年にR.HAMELIN et J.LAUFFRAYによって測量されたユーフラテス中流域

心に観察すると、その変遷が観てとれる。この60年の間に起こった現象であるが、実質的にはこの地域のすぐ上流にベフメダムが1970年の初めに建設され、それ以後水量が調整され、洪水、氾濫などもなかったと思われる。したがってダム建設までの約25年間にこのような河川の変化があったと考えられる。この短い周期の中で、河川が氾濫を起こしたり、水路が変わったりすることを考えると、このユーフラテス中流域の農耕地として計画的に生産するという役割に疑問を抱く。また氾濫原の耕地面積の狭い上に、仮に氾濫原を北側岸と南側岸に分割した場合、耕地はさらに半減することになる。河川の水量や流速にもよるが、対岸へ渡ることが困難な場合は耕地面積は減少することになる。そうした場合、特に南側岸の氾濫原における狭い面積を考えると、周辺との何らかの強い協力関係がなければ巨大な集落や都市は成立しないと思われる。その点、北側岸の地域は、背後の北部にはハブル、バリフ川や肥沃な三日月地帯を有することから、農耕地というよりはユーフラテス中流域の持つ地理的位置の経済的、政治的役割に時代とともに移っていったと思われる。上記これらは推測の域をでないため、この一帯の遺跡の分布を実際に調査して、ユーフラテス中流域と遺跡の関係、特に共通の研究テーマであるピシュリ山系の遺跡群とユーフラテス川との関係を調査したい。

2、ユーフラテス中流域の広領域における農耕地の変化

ここに1975年6月27日(Landsat MSS)(図3)、1983年7月12日(Landsat MSS)(図4)、1990年9月1日(Landsat TM)(図5)、2005年7月2日(Spot Ⅳ)(図6)の衛星写真がある。これらの植生を調査するために近赤外線による解析をすると、植生の状況が赤色の濃淡で表現される。これらを詳細に調査するには現地において、実際にどのような植生なのかを調査して、それがどのような色の濃淡を示しているのかを比較解析していく必要がある。ただし、今回はそれらを単に耕地として見た場合、どのように耕地面積が変化しているかを観察してみる。ハブル、バリフ川流域の耕地が徐々に拡大して1990年には飛躍的に拡大したことが視てとれる。特にバリフ川の上流域と下流域のラッカ周辺は耕地が拡大している。ユーフラテス川の南側広域に関しては耕地としての利用はあまり拡大していないが、レサファ中心にワディでの耕地化が進められていることがわかる。ただピシュリ山系における植生は少なくともこれらの衛星画像からは認められない。春4月頃撮影された衛星画像でどのような植生が観察できるか、併せて現地調査する必要がある。

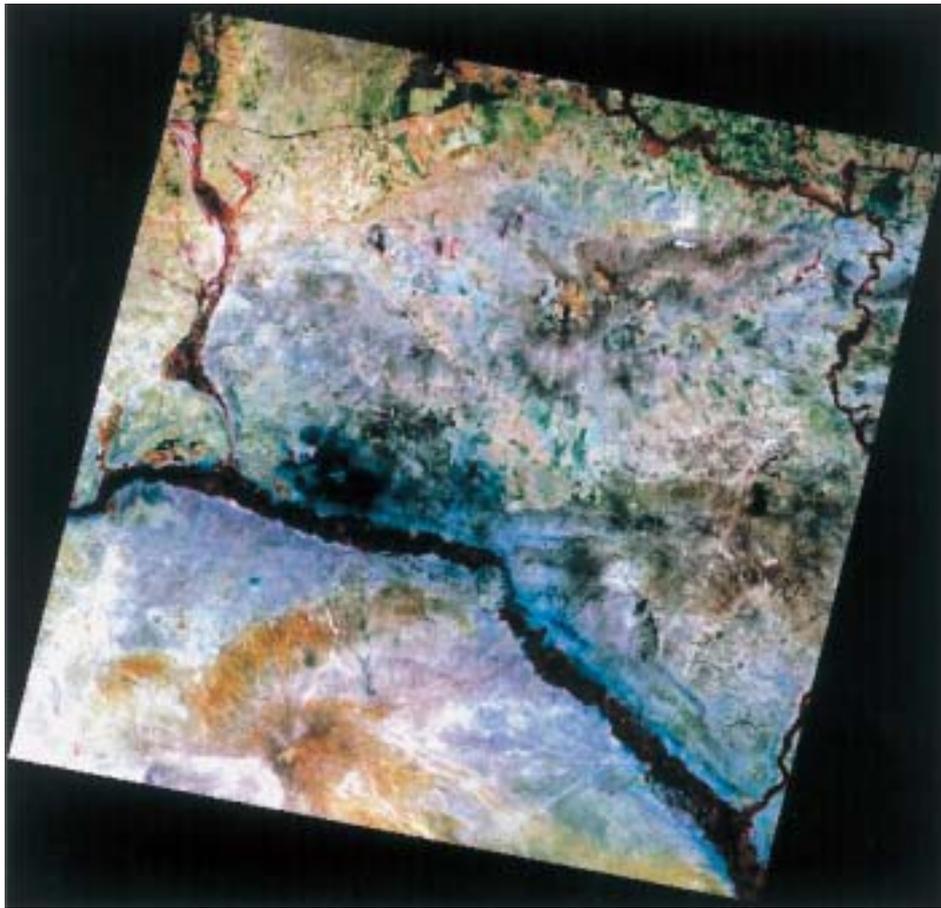


図3 19750627にLandsat MSSで撮影されたユーフラテス川中流域の衛星画像

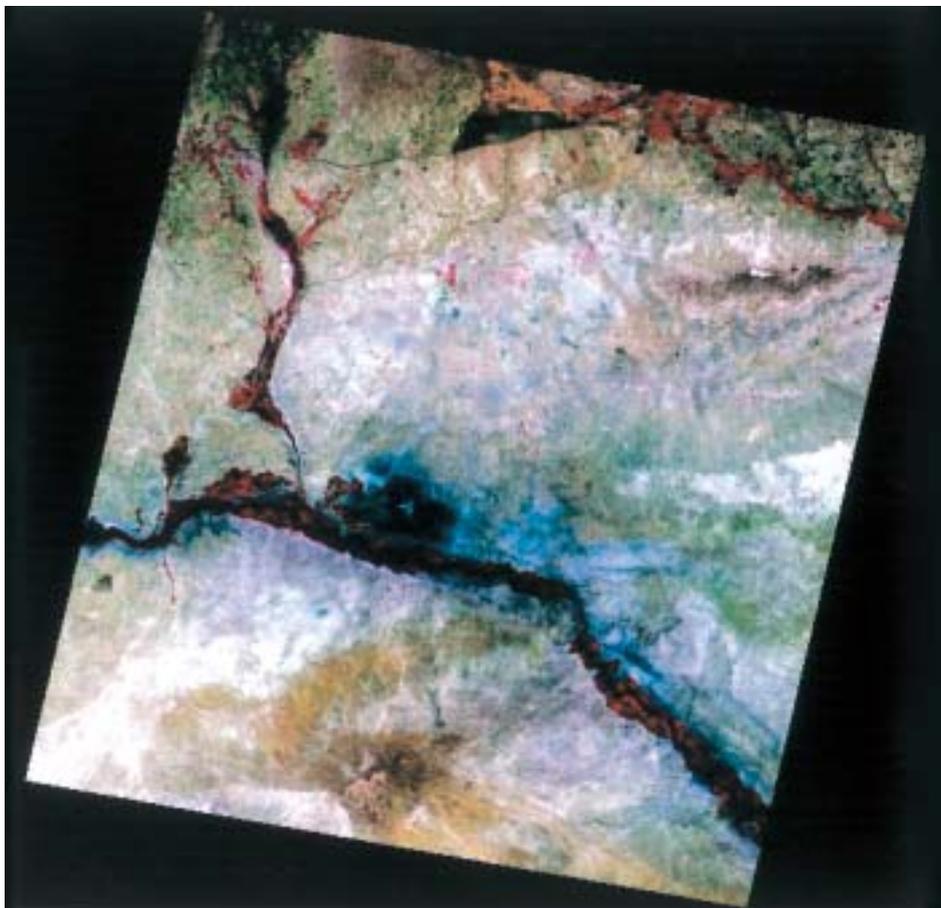


図4 19830712にLandsat MSSで撮影されたユーフラテス川中流域の衛星画像

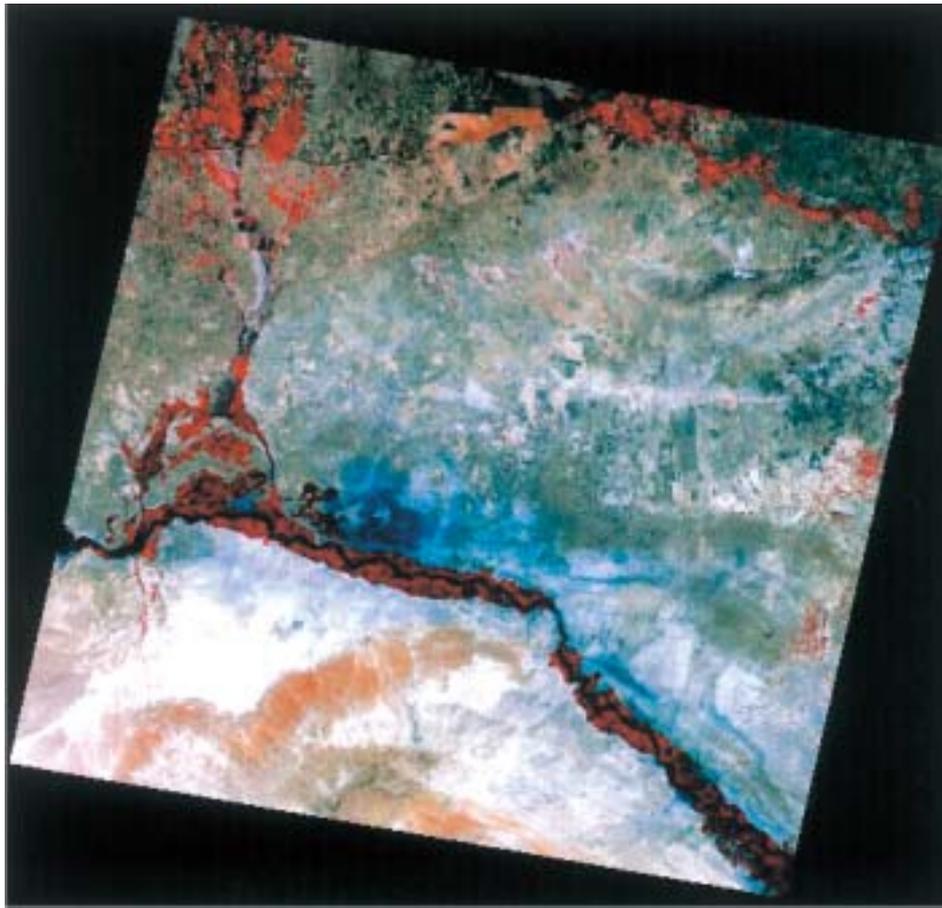


図5 19900901にLandsat TMで撮影されたユーフラテス川中流域の衛星画像

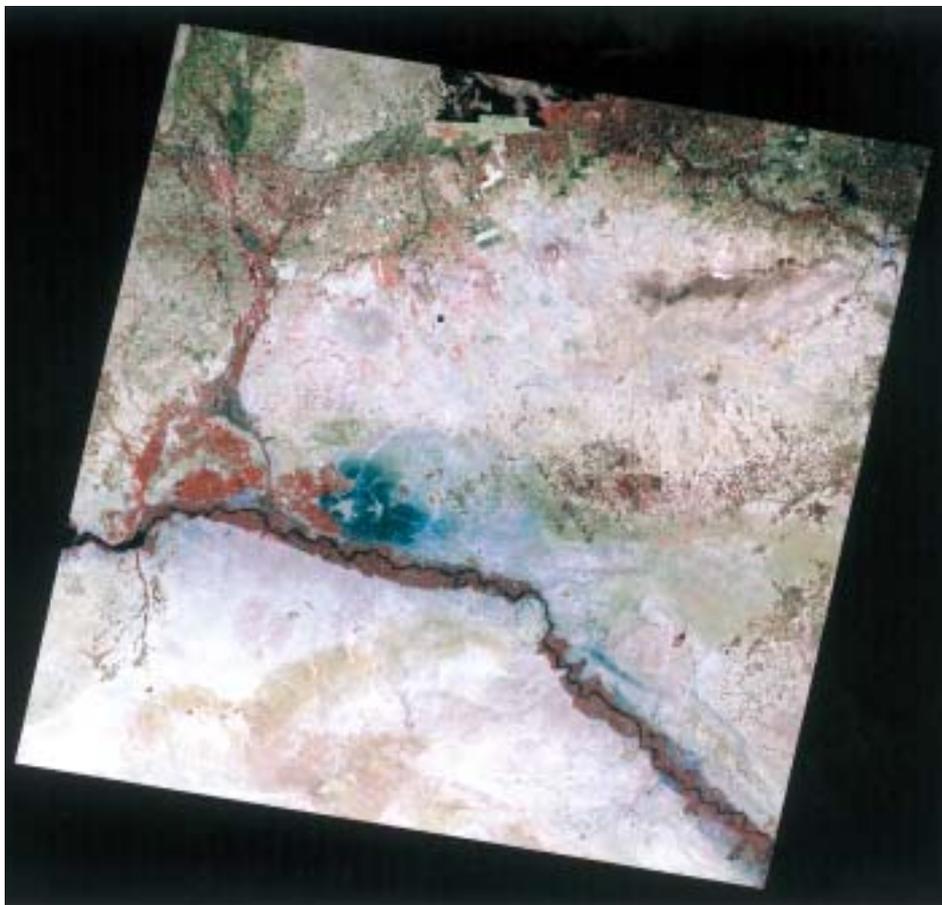


図6 20050702にSpotで撮影されたユーフラテス川中流域の衛星画像

公募研究「北方ユーラシア遊牧民部族社会の 考古学的研究」の開始にあたって

高濱 秀（金沢大学）

公募研究「北方ユーラシア遊牧民部族社会の考古学的研究」研究代表者

特定領域研究「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」に関連する公募研究として、我々の研究計画を選んで頂いたことにまず感謝の意を表したい。そして以下に我々の行っている研究と、今回の研究方針などについて述べたいと思う。

我々の主に研究しているのはユーラシア北方草原地帯の騎馬遊牧民である。具体的に言うと、黒海沿岸のスキタイ、ドン・ヴォルガ川あたりのサウロマタイ・サルマタイ、中央アジアのサカ、山地アルタイのパジリク文化の民族、中国の北の匈奴などが、それに相当する。彼らを西アジアのセム系部族の遊牧民と比べると、地域だけでなく、年代の上でも大きな差がある場合が多い。そして更に重要なことは、スキタイ、サルマタイ、匈奴などの遊牧民は、騎馬を用いて遊牧を行なうことを始めたと考えられていることである。これにより現在までこの地域で行われている騎馬遊牧の原型ができたと考えられているのである。

ソ連の学界では1960年代に、これらスキタイなどの民族を初期遊牧民 *rannie kochevniki* (early nomads) と呼び始めた。それはスキタイなどの一定の民族・地域をその始祖あるいは代表にすることを避けた呼び方である。しかしこの呼び方は、セム系の遊牧民と比較を行う際には、いささか混乱を招くかもしれない。区別するために、ここでは我々のほうの初期遊牧民を「初期騎馬遊牧民」と呼ぶことにしよう。

初期騎馬遊牧民が生まれたのは、紀元前1千年紀の始め頃と考えられている。彼らの文化は、特色のある武器、馬具、そしてそれらを飾る動物紋様を共通の特徴としており、この種のものは、スキタイ、サウロマタイを初めとして、シベリア、中国の北まで、草原地帯の至るところに広まった。このような文化の起源について、1970年代頃までは、スキタイの西アジアへの侵入を契機として西アジアにおいて形成されたものとする説が有力であった。しかし近年では、初期騎馬遊牧民文化の東方起源説が有力になってきたといつてよいであろう。特に、1971-1973年に南シベリア、トゥバにおいて行われたアルジャン古墳の発掘が、その契機となっている。そこで出土した鏃や馬具は、形式的に黒海沿岸ではスキタイ文化以前に見られるものに相当する一方、完全に完成した形のスキタイ式の動物紋様も出土したからである。また中国北辺東部に分布する夏家店上層文化には、動物紋様など初期騎馬遊牧民文化に共通する要素が認められ、その年代が西周時代後期から春秋時代前期、すなわち黒海沿岸の先スキタイ期に相当することも明らかになって



写真1 遺跡全景

きた。このように草原地帯東方におけるこの時期の様相が注目されるようになってくると、また調査の比較的行き届いていないモンゴル高原の状況が問題になってくる。

モンゴル高原においては、鹿石と呼ばれるものが知られている。高1～3mほどの方柱状の石に鹿などの図像を彫りこんだもので、その鹿の図像から初期騎馬遊牧民文化とのつながりが早くから考えられていた。しかしE.ノヴゴロドヴァの研究によって、鹿とともに彫りこまれた剣や戦斧などの武器が、商代、西周時代に併行する中国北辺のものや、夏家店上層文化のものと類似することが明らかになった。以前に考えられていたよりも古く、前2千年紀の後葉から前1千年紀前葉ということになる。鹿石はモンゴル高原において最も多く発見され、すでに500個を超えている。またザバイカリエ、アルタイ、新疆ウイグル自治区、ウラル地方、北カフカス、黒海北岸からも少数発見され、北カフカス出土のものは、先スキタイ時代の古墳に伴っていた。アルジャン古墳からも鹿石の一種の破片が発見されており、アルジャン古墳自体よりも古い時期のものとも考えられている。このようにして鹿石は初期騎馬遊牧民文化の始まりの頃と強い関係を持つことが推測されるようになってきた。

またモンゴル高原においては、青銅器時代の埋葬址と考えられる遺構として、ヘレクスルが知られている。ヘレクスルとは、積石塚を方形あるいは円形の石列で囲ったもので、多くの場合、主にその東側に石堆が複数置かれ、さらにその外側に全体を囲むようにして、数個の石からなる小型ストーンサークルを何重にも配置することもある。発掘しても遺物の出土例がほとんどないところから、その年代には異説もあり、用途についても、墓というのが定説になったとはまだ言いがたい。しかし初期騎馬遊牧民時代になって、ユーラシア草原地帯に突然出現する大型墳丘墓

の先蹤としてヘレクスルを考えることは、きわめて自然なことである。

近年我々はモンゴルのオラーン・オーシグ遺跡で調査を行っている（写真1）。この遺跡はモンゴル中西部の北側、フブスグル県の県庁所在地ムルの西側20kmほどのところに所在する。セレンゲ川に西から流入するデルゲル・ムル川の北岸で、オラーン・オーシグ（「赤い肺」の意）という山の東側である。ここには大小約15基ほどのヘレクスルと14個の鹿石があるが、ヘレクスルは遺跡の北部に多く、鹿石は3個と11個の2群に分かれて、遺跡の南部に見出される。ロシアのV. ヴォルコフとE. ノヴゴロドヴァがオーシギーン・ウブルという遺跡名で調査報告を発表しており、鹿石の遺跡として有名である。特に14号鹿石には上に人面が表わされているが、元来戦士を表わしたものと考えられる鹿石の代表的な存在でもある（写真2、写真3）。

オラーン・オーシグ山を東、南、西の方向から取り巻いて、10箇所ほどのヘレクスル群が見出される。この遺跡はその一つであり、また鹿石を伴う唯一の遺跡でもある。また山のウブル（南）ではなくほぼ東に位置している。我々は、調査に当たってその全体的な立地を前提とする必要があると考え、この遺跡をオーシギーン・ウブルではなく、オラーン・オーシグと呼んでいる。

我々がここを調査対象として選んだ理由は、モンゴル青銅器時代の主な遺構と考えられる鹿石



写真2 14号鹿石



写真3 2号鹿石

とヘレクスルが共に存在するからであり、その2種の遺構の関係を捉えるのに適当と考えたからである。そのほか、やはり青銅器時代の墓である板石墓も1基あり、少し離れたところに数基見出されている。

我々は既にこの遺跡において1号および12号ヘレクスルを調査し、南部の鹿石の周辺をも一部発掘した。1号ヘレクスルは積石塚の直径が約13m、高さ2m足らずで、方形の石列によって囲まれ、主としてその東側に21基の石堆をもつ（写真4）。12号ヘレクスルはこの遺跡で最も小型のもので、直径9mの積石塚の周りに石列が円形に周るものである（写真5）。南側に石堆が1基あるが、それは同時期のものかどうか、よく分からない。

1号ヘレクスル東側の大部分の石堆からは、鼻面を東に向けた馬の頭骨と頸椎が出土した。また4号鹿石周辺のストーンサークルからも、同様の形で馬の頭骨と頸椎が発見された。石堆とストーンサークルの構築法にも似たところがある。そこからヘレクスルと鹿石は、ほぼ同じ時代に同じ人々によって造られたという推定が導き出されるであろう。

1号ヘレクスル積石塚の縁辺から鹿石の一種と考えられる石が1個発見された。これは鹿の図像が表わされず、単に円が二つ彫られただけのものであるが、このような石には他にも多くの類例があり、鹿石の一種と認められている。今回発見された石はこの積石塚に付属するものであり、積石塚と同時期であろう。鹿の図像を持つ鹿石とこの種の単純な鹿石が、どのような関係にあるかが問題となる。

1号ヘレクスルの中心の積石塚からは、石棺が発見されたが、中に人骨は発見されなかった。また12号ヘレクスルのなかにあった石棺からは、5、6歳の小児の骨が出土した（写真6）。それらの骨のなかには焼かれたものもある。なぜ人骨が発見されない場合があるのか、その理由はまだ不明である。タルバガンなどの小動物によって骨まで食われてしまった、あるいは遺体を納めない象徴的な墓であった、などの理由が考えられよう。いずれにしてもヘレクスルが基本的に埋葬施設であったことは証明されたといつてよいであろう。

そうすると、このオラーン・オーシグ1にある15基ほどのヘレクスル群は、家族あるいは一族など何らかの親縁関係にある人々の墓と考えることが許されよう。5、6歳の小児のために、小型であるとはいえ、直径9メートル程の積石塚が造られたのは、その小児の社会的地位の反映なのであるか。

先に述べたようにオラーン・オ



写真4 1号ヘレクスル



写真5 12号ヘレクスル



写真6 12号ヘレクスル石棺

ーシグ山の周囲には10箇所ほどにヘレクスル群があるが、これらのヘレクスル群のヘレクスルにはそれぞれ大小があり、オラーン・オーシグ や、 にはかなり大型のものがある。特に にあるものはきわめて大きい。またヘレクスルの型式も一様ではなく、四隅に立石のある四隅立石墓ともいべき墓のある群もある。これらのヘレクスル群は、お互いにどのような関係にあった

人々の残したものであろうか。当時の社会を考えるには、これらの問題にある程度の解答を与えなければならないであろう。

鹿石の周りには数多くのストーンサークル状のものがある。4号鹿石附近のストーンサークルではヘレクスルと同様の馬の頭骨の儀礼が見られ、鹿石群は全体として何らかの儀礼的な遺構と考えられる。昨年調査した第7号鹿石周辺では、当初ストーンサークルと思われたものが意外に高さがあり、石堆あるいはほとんど小型の積石塚ともいうべきものであったことが判明した（写真7）。他の遺跡でも鹿石群の周りにストーンサークル状のものがあることは知られているが、発掘によって元来の様相を明らかにした例はない。

我々は、今年度はこのオラーン・オーシグI遺跡において、第7号鹿石周囲の発掘を継続することにより、部分的ではあるが、鹿石群の元来の構造を明らかにしたいと考えている。鹿石群の元来の構造を知ることは、騎馬による遊牧に移行しようとしていた時期の牧畜民の精神生活について、大きな手掛かりを得ることになるであろう。また鹿石の三次元のデジタル記録を作成することを計画している。ほとんど全ての鹿石の拓本をすでに採ってはいるが、この遺跡がますます観光地化し、鹿石も損傷を受ける可能性があることを考えると、単に鹿石の図像だけではなく、鹿石全体の現時点での記録をとっておく必要があると思われるのである。

来年度は西アジアに現われた初期騎馬遊牧民スキタイや、セム系部族との類似点・相似点などについて考察するため、西アジアにおける遺跡や、ロシアにある遺跡、博物館などを訪れて調査したいと考えている。



写真7 7号鹿石附近

Newsletter 「セム系部族社会の形成」 No.3 2006年8月31日発行

発行： 文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」
「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」
代表 大沼克彦

編集：大沼克彦 藤井純夫 西秋良宏 常木 晃 佐藤宏之 宮下佐江子
事務局：〒195-8550 東京都町田市広袴1-1-1 国士舘大学イラク古代文化研究所内 大沼研究室
Tel：042-736-5489 Fax：042-736-5482 E-mail：kaonuma@kokushikan.ac.jp
ホームページ：http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryouiki/index.html

